

書大全』はもとより、江戸期の臨床医家が数多く利用読破してきた宋・金元・明代にわたる基本書の和刻本を揃えた全七〇種、四六七余巻を集大成し、B5判各頁見開き四丁分を二段に縮少影印した利用価値の高い復刻版で、この膨大な基本典籍がスペースを余り取ることなく座右に置くことは大きな朗報である。当該領域を専門に研究する者にとつてはもとより、和書を援用される漢籍の原文を確認したくとも、手元のない漢籍を参照するのに億劫がる向きにとつても、手軽に検索できる便利さがあり、研究のスピードが挙がることこの上ない集成本である。

しかも、書誌研究には定評ある両編者の解説が懇切丁寧になされておられ、刊本状況を和漢両面にわたって克明に追跡し、原著者・和刻本者の伝記にまで及んでいる点で、現時点での情報がほとんど折り込まれているといつても過言ではない。この集成のような良質の復刻本が他の医史領域に及んで、研究者が座右で安心して繙けるような影印・復刻版が相次いで出現することを期待したい。安直な復刻版がまかり通る今日、一服の清涼剤といえる稀れに見る良質の影印・復刻版である。大方の活用を期待すると同時に、両編者の労を多しむたい。

(宗田 一)

〔エンタプライズ社、東京都文京区本駒込二一―三イカハタビル5F、〇三―三九四二―八〇九六、一九九二年、B5判 全十六輯、セット定価二八〇、〇〇〇円〕

北小路博央著

『開業医ブルース 医家二十一代のつぶやき』

北小路家二十一代当主であり、本会々員である北小路博央氏が表題の一書を刊行した。外科医としての勤務医生活を終え、昭和四十四年に京都市内で外科医院を開業して以来すでに二十数年。この四十年間に体験した数々哀歓苦楽の思い出を軽妙なタッチで記述した半生記である。

内容を目次により紹介する。

I、開業はいばらの道か

一 開業医ブルース

二 保険医協会マーチ

三 医学史パラード

II、ふりむけば花の勤務医時代

一 花の厚生技官

二 花の医局長

三 花の病院長

ここで本会々員として特に注目していただきたいのは、医学史パラードの項である。

既に多くの方々も御存知のとおり、著者はわが国最初の女科医と称される安芸守定を家祖とする安芸家(四代守宣―一四七七没―の頃より北小路と改姓)の二十一代当主である。

安芸(北小路)家の歴史については、江戸時代の『雍州府誌』・

『歴世尚葉略伝』等にもでており、明治以後は日本女科史、日本医学史以下殆んどの日本医学通史に記述されている。

守定は二条家々司（一三〇〇年頃）であり、御所の西にあった御池の畔に住んでいたが、竜神より助産の法、神仙散の秘方を授かったという伝説に包まれている。二代將軍足利義詮の室紀良子の出産に際し功が有つて尚葉にあげられた。その時出生した若君が三代將軍義満となつた。それ以後、安芸家は宮中、足利家の産事に侍することとなつた。いま北小路家に伝わる御産所日記三巻には、永享元年（一四二九）より永録三年（一五六〇）までの一三〇年間にわたる足利將軍家の産事が記してある。『群書類従』に採録されているが、日本史専門家の研究（満田栄子、御産所日記の一考察、史窓二七号、昭四十四・今谷明、北小路家の文書について、史林、六十巻二号、昭五十一）も既に数々なされている。

また同家十代貞俊の代（桃山時代）に描かれたとされる安芸守定像がある。これは日本女科史や日本医学史に載せてある守定像の原画である。守屋正著「安芸守定像について」（医学選粹、七号、昭五十二）に詳しく解説してある。また『京都の医学史』産科篇において、私も多く引用させていたが、

さらに北小路家六六〇年の歴史の中でいまひとつ特筆すべき事がある。日本の三大飢饉の一つといわれる天保飢饉の際、京洛の街にも難民、死者が溢れた。この時北小路家十六代竹窓（三郎）は大学助であり儒者として高名で、三条東洞院で教諭所を開いていたが、その惨状を見るにしのびず、天保八年、

町奉行所与力や鳩居堂主人熊谷直恭らと協力して、三条河原に救小屋を作つて十五カ月間にわたつて、多くの難民・病人に食糧、医薬品を与えた。その状況は一一図に描かれて荒歳流民救恤図一巻として残されている。大塩平八郎の乱とほぼ同一時期に行われた福祉事業である。

著者は所蔵する『御産所日記』の原巻と『群書類従』本とを比較した結果、六カ所の異同をみつけたという。同家の史料についてはまだ未研究の部分も多い。また医学史のみならず、政治史、文化史に関連する個所もある。

著者の真摯な人間性のあふれた好著であり、これらも含めて著書が自家の家史について内側から見つめていることは、医学史研究にとつて甚だ興味深いものがある。

（杉立 義一）

〔かもがわ出版、京都市中京区衣棚通夷川上ル吉田ビル、電話〇七五―二二―一三五八七、一九九二、判、一九九頁 一、三〇〇円〕

小関恒雄・北村智明訳編

『クニツピングの明治日本回想記』

本書は明治期の御雇外国人教師であつたドイツ人、エルヴィン・クニツピング（Erwin Krippner、一八四四―一九二二）の『回想記』の訳編書で、クニツピングの曾孫トーマス・フィールハーバー氏の元に残るクニツピング自身が子孫のために書き残